

まえがき

1984, 1985年度の2年間にわたり, 総合研究(A) “西南日本の中生代含放射虫地帯の形成過程” (代表者: 市川浩一郎)が実施され, 多くの成果があげられてきた。その途上で日本古生物学会例会が1985年6月15, 16日に大阪市立大学で開催され, その際シンポジウム “化石放射虫の分類・古生物地理・生層序——最近の成果より” が行われ, 盛況であった。このシンポジウムは上記総研課題に示された地域・年代にこだわらず, 古生物学・化石層序学の面に重点をおいて企画された。その際 postprint を作成しようとの意見が出て, 講演者に意向を問合せたところ少なからぬ反応があった。また上記例会の一般講演の中でも放射虫関係の発表で執筆の希望があった。一方, 総研関係ではMRT (Mesozoic Radiolarian Terranes) Newsletter, No.1 が1984年度の成果として1985年3月に刊行され, No.2 が1986年3月出版の予定で準備が進められてきた。このような状況のもとで出版の体裁を検討してきたが, 総研とシンポジウムとは本来の趣旨は異なるものの, 放射虫という点で互に関連が深く, また論文のいくつかは両側面をあわせもっているので両者を別々に出版するよりは一冊として出した方が利用価値も高いと考えるようになった。

そこで, 大阪微化石研究会の了解を得て, 同研究会誌 (NOM) 特別号, 第7号として出版することとした。それは古生物学会シンポジウム論文集とMRT Newsletter, No. 2との合併号である。

諸論文は以下の大項目にわけて配別されている。

- 1 放射虫化石層序・化石群集帯
- 2 現生および化石放射虫の分類・分布など
- 3 西南日本の中生代を中心とする含放射虫地帯
- 4 堆積・続成, 古地磁気
- 5 総括など

収められた38篇のうち, 参考のため古生物学会関係の発表を記すと第1, 2, 3, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16の諸篇である。発表の内, 講演者の都合で本冊に収めるにいたらなかったのが7件ある。その他は総研関係で, また上記のうち6篇は総研の成果でもある。

1982, 1983年度に総合研究(A) “本邦中・古生界の放射虫生層序に関する総合的研究” (代表者: 水谷伸治郎)が実施され, その成果は部厚い研究成果報告書に収められている。その巻末に “日本人による放射虫化石及び化石層序に関する論文文献集” が載せられている。それは著者別と発表年別とからなっているが, 今回前者について1986年はじめまでの文献を加えたものを水谷教授の御尽力で巻末に収めた。今後の文献検索に活用していただきたい。

大阪微化石研究会誌特別号，第5号（1982）として第1回放散虫研究集会論文集が出版されている。この論文集は1980年代はじめに爆発的に進展した日本の放散虫関係の諸研究を収めた記念すべきものである。その巻頭言で中世古幸次郎は次のように述べている。“本冊子の執筆者は，大部分が若い研究者で，放散虫研究について日が浅く，不備の点も多いかもしれない。しかし本冊子は，日本の放散虫の研究の現状を総括するものであり，その幾つかのものは今後の研究の進むべき方向をも示している。また，日本列島造構史に関して多くの課題も示唆しているものと考えられる。”

その後，中・古生代に関しては上記の水谷伸治郎（代表）の総合研究はじめ，日本各地で極めて重要な成果が放散虫研究を活用してあげられてきた。その進展の全貌は一冊子に収めるには余りにも多岐におよんでいる。本書にはそのうち，上記した経緯にもとづく研究諸側面の最近の成果が収められている。本論文集が今後の放散虫及び含放散虫地帯の研究に広く役立つことを期待する。

本論文集の出版は多数の執筆者の熱意によるものである。その多くは若手・中堅層による成果である。自主的な発表表現を生かして，編集にあたっては厳密な査読を加えてはいない。ただ，幾つかの論文については紙数の関係上大幅な縮小・削減をお願いせねばならなかった。別の機会にフルペーパーが印刷されることを期待したい。本論文集の編集一刊行は八尾昭氏の絶大な労力により遂行することができた。ここに，多方面の関係各位に心から謝意を表す。

1986年3月

大阪市立大学理学部地学教室

市川 浩一郎